

『クリスマスの約束 — ルカ福音書による37の黙想』

大嶋 重徳著 教文館 2019

初等部教諭

馬越 嶺

「クリスマスを迎える時期というのは、一年の終わりでもあります。過ぎた一年を振り返ると、心が重く、暗く、悲しくなるというお方もおられるでしょう。(中略)しかしこの暗く、重く、悲しい出来事の中にも、神がおられて、神が自分の人生に計画を持っておられることに気づくことができるならば、その悲しみの出来事は、神からの深い慰めと大きな喜びとなります。」(「はじめに」より)

コロナ禍で迎えるクリスマスとなりました。昨年の今頃は、2020年がこのような年になろうとは想像もしていませんでした。誰にとっても、心が暗く沈むことの多い一年だったでしょう。しかしそうであればこそ、私たちの心を照らすクリスマスの光は、よりその輝きを増すのではないのでしょうか。

本書は、「ルカ福音書による37の黙想」とあるように、待降節(アドベント)から1月6日の公現日(エピファニー)まで1日に1章ずつ、37日間読み進める「黙想」の書です。「黙想」は英語で「meditation」または「silent meditation」と言いますが、それは「黙って静かに思い巡らす時間」であり、「自分の人生に起こった出来事の意味を、神との対話の中で考える」(「はじめに」)時間のことです。

著者の大嶋重徳先生は、埼玉県川口市



にある鳩ヶ谷福音自由教会の牧師であり、昨年度までKGK(キリスト者学生会)の主事として20年間、大学生・ユース世代と関わりながら、御言葉を語り続けて来られた先生です。今年度から本学の教育人間科学部でも「礼拝学」の授業を担当されており、また以前には初等部や高等部の礼拝にも来られて、児童・生徒たちに向けて楽しく分かりやすくメッセージを届けてくださったこともあります。

放っておけば、12月は忙しさに流されて、あっという間に過ぎていきます。だからこそ本書を手に取り、ご自分の生活の中から少しだけ時間を取り分けて、「黙想」するクリスマス・シーズンを迎えてみてはいかがでしょうか。